

星に願いを*** 梵字の星曼荼羅

前田 依里子
(放送大学生)



皆さんは、星曼荼羅をご存知ですか？
私は、この春から京カレッジで、梵字で星曼荼羅を書く、という種智院大学の科目を履修しています。これが、とても面白いのです！

左の写真は、前期に初めて制作した、梵字の星曼荼羅です。

『曼荼羅』は、サンスクリット語のmandala—本質・神髄をもつもの—の意味があり(*1)、密教の世界観・宇宙観を象徴的に表現する聖なる図形で、

瞑想修行や儀礼遂行に使われます。(*2) 曼荼羅には様々な種類がありますが、大日如来をはじめとする諸仏の姿が描かれている仏尊曼荼羅が有名です。梵字の曼荼羅は、一つの仏を一つの梵字で象徴的に表したもので、仏を表す文字を種字ということから『種字曼荼羅』と呼ばれています。その一種である『星曼荼羅』は、星や星座を表す梵字で曼荼羅を構成しています。

星供曼荼羅・北斗曼荼羅とも呼ばれる星曼荼羅は、中国の陰陽五行説や占星術、道教の影響を強く受けており、天変地異や疫病などの厄除や、延命を祈る北斗法の本尊として祀られてきました。平安時代には、施主(主に貴族)の願いにより、多様なバリエーションが生まれました。北斗曼荼羅は、現在でも、毎年二月の節分に星供(星祭)の修法本尊として使われています。夜空の星を見上げて願い事をするのは、今も昔も変わっていないのですね。

紀元前3世紀頃からインドで発達した梵字(サンスクリット文字)は、現在は殆ど日本のみで伝えられています。空海が持ち帰った梵字は約1万6千字ありましたが、現在主に使われている文字は約6千字だそうです。梵字は表音文字ですが、一つ一つの文字そのものに独自の意味があり、またその字型は、まるで絵のようにも思えます。ユーモラスな顔に見えたり、ダンスをしているようであったり、飛び立つ寸前の誇り高く美しい鳥に見えたりするものもあります。私には、“書く”というより、“描く”感覚に近いように感じられます。毛筆で描く梵字は、私たちが馴染んできた習字とは全く違う筆運びをします。筆を向こう側に倒して書く事もあるのです。ですから、まず筆運びの固定観念から自由になる事が求められます。その為もあるのでしょうか、梵字に向かい、無心に描くときは、写経をしているような、一種瞑想状態にもなっています。

今回、制作したのは、中心に釈迦金輪(北極星)、八葉蓮華に北斗七星、残り一つの土星と上下八つを合わせて九曜、中院に黄道十二宮、外院には太陰曆に相当する二十八宿、と広がる星曼荼羅です。写真では分かりにくいかもしれませんが、A1サイズの紙に細い金色で蓮華や内院・外院の枠が描かれています。決められた大きさの円の中に梵字を描いてゆくのですが、文字のバランスを取りながら円の中心に描くのは、初心者には至難の技です。はみ出さないように描くのが精一杯でした。ご指導いただいている児玉義隆先生が描かれる梵字は、本当に美しく、力強い存在感を放っていて、まさに仏の文字、という感じを受けます。日々精進の修行があつてのことでしょう。この初作品は稚拙ですが、私にとって大切な宝物になりました。いつか、星のように美しい梵字が描けるようにと、願いつつ練習をしようと思います。

*1 頼富本宏『曼荼羅の鑑賞基礎知識』至文堂 1991

*2 正木 晃『マンダラとは何か』NHKブックス 2007

